

## 「蚕霊供養祭」から時代の流れとともに

### 「昆虫供養祭」へ

「昆虫供養祭でのあいさつから」 分会委員長

今年は二十世紀最後の昆虫供養祭になります。この供養祭は長年にわたって「蚕霊供養祭」と言われてきました。すなわち、蚕糸試験場からの伝統的な行事の一つであります。ここでは、昆虫とりわけ、蚕がわが近代日本国の発展に著しく貢献してきた功績をしのび、その偉大な足跡をしのびたいと思います。若干、時間をいただきますと、蚕が中国から我が国に伝来してきましたのは奈良時代であります。養蚕技術とともに伝来し、以後日本の風土と国民性にマッチし、農家で養蚕が続けられ、租税の一つとして絹織物が農家から納められました。当時の農民は麻、絹織物が主流でありましたので、絹織物はプレミアが付いたものであったでしょう。当時の繭は残念ながら、現存していないと思われますが、蚕糸昆虫研の展示室には近世江戸時代の繭の実物が展示されてあります。小粒で現在の指定品種と比べ、大きさでは格段の差があります。

近代二十世紀になって、一九一一年に外山亀太郎博士により、「蚕の一代雑種」の提唱がなされました。この雑種強勢と言いますのは、トウモロコシで実施されます以前に学問的立場から提唱されたものでありますが、惜しいことには論文は日本語で書かれていたので、欧米の学者には理解されなかったという誠に残念なことであります。

この一代交雑により実際の品種育成がなされた結果、繭の収穫量これは養蚕用語で収繭と言いますが、飛躍的な生産量となり実に十六万トンに達したと聞きます。その後、わずか十二年間に生産量は四十五万トンにも達しました。この年は昭和元年であります。時あたかも日本の近代化が強く叫ばれ、その一環として富国強兵政策が進められました。欧米に「追いつき、追い越せ」の施策が唱えられ、その施策に著しく貢献したのが生糸の輸出による外貨稼ぎであり、外貨でもって近代兵器の購入が積極的に推進されたのは事実であります。

当時、繭の増産技術開発が進められ、一化性蚕品種による年一回の飼育、または二化性蚕品種による年二回の飼育では繭の生産は限度があるということで、年間数回の養蚕を行うには、蚕卵の人為的な孵化しかないということで蚕糸試験場で研究が進められ、塩酸による人工孵化技術が1930年代に確立しております。このように生糸は輸出すればするほど外貨が入ってくるという全くもって優れた価値をもつ品物でした。しかしながら、20世紀における不幸な出来事の一つとして太平洋戦争における敗戦があります。この一九四五年、我が国政府は外地からの帰国者に対する食糧増産を目的に政府桑園減反を指示しています。すなわち衣服よりまず食べるものを優先したわけです。しかし連合軍GHQはその年の十月に減反中止命令を出しています。軍隊も時の女性のきらびやかな絹のドレスに負けたのかな、という印象です。

一九四七年には蚕糸復興五カ年計画を起こし、輸入食料の見返りに繭・生糸の輸出という政策を行いました。これは先に述べました生糸を売って外貨を稼ぎ、軍艦を購入するということに

対し、生糸を売って食糧を購入するという我が日本国民の滅亡を救ったのであります。一九五〇年には繭の増産も持ちこたえ八万トンまでに回復しました。その後、一九六一年には国民所得倍增計画や生糸需給が世界的に好転した結果、我が国の繭の生産量は十一・一万トンになりました。

しかし、以後、国民が豊かになったのにも関わらず、着物の販売量の減少、繭価の低落等とともに繭の生産量は減少し、昨年に至ってはわずか二千トンです。平家物語にあります「盛者必衰の理をあらわす。」のことわざではありませんが、カイコという虫が我が国の歴史にこれほど大きな足跡をこの二十世紀に残してくれました。

学問の領域においても、先に述べた一代雑種強勢、人工孵化、限性蚕品種、自動繰糸機、人工飼料、人工飼料を用いた稚蚕共同飼育（昆虫工場）、桑・カイコの品種育成、用途別蚕品種として細・太織度品種の育成、バキュロウウイルス遺伝子発現系、フランスのリヨン大学のベクターと神田さんの遺伝子導入技術による形質転換蚕の作出など学問的にも優れた業績をカイコはわれわれ人類に授けてくれました。蚕糸試験場、名前が変わって蚕糸・昆虫農業技術研究所は二十世紀の初期からずっと世界のカイコのCOEではなかったのかと、思います。

このようにわれわれに誇りと自信をくれたカイコに感謝して、昆虫供養祭のご挨拶とします。

蚕友文化

第二十六号、二〇〇〇年